

Special Essay

NIH(National Institute of Health) の図書館

呼吸器・神経・膠原病内科

谷脇考恭

私は1991年から約3年間、米国のNIH(National Institute of Health)で研究生を送りました。その時によく図書館に通いましたので、私を感じたNIHの図書館の印象を紹介いたします。NIHは米国最大の医学研究所です。NIHの図書館はPubmedを作っており、蔵書の数は半端ではありません。普通の図書館にはないような本(Society for Neuroscienceの学会抄録など)があり、文献を探すのは極めて容易でした。ちなみに私は、文献を探すよりも新聞(主にNew York Times)のスポーツ欄(プロのアメフトやバスケットボールの記事)を読みに行くことの方が多かったと記憶しています。さて文献を探し出すと、次はコピーです。複写センターにいくと、10人弱の行列が出来ています。最後尾に並び、自分の順番を待ちます。自分の番になると係の人がカードをくれます。これをコピー機(5台ほどあります)に差し込むと、無料(!)で複写できました。ただし、サイズはA4(US letter?)のみで時間がかかり、またカードの制限時間は5分で、制限時間が来るとコピー機は止まってしまいます。コピーが終了しない場合はカードを係に返し、また列の最後尾に並びます。この列はボスを下っ端も関係なく早い物順であり、平等です。また制限時間があるために、すぐに順番がくるようになっており、とても合理的に感じました。

2000年問題の混乱直後に、再びNIHを訪れる機会がありました。図書館を訪れると、蔵書は相変わらず膨大ですが、図書館を訪れる人が極端に減少していました。一番驚いたのは複写センターで、行列が全くありませんでした。係員も暇そうで、私も制限時間を気にせずコピーできました。なぜ複写センターが暇になったのでしょうか? その謎はラボで解けました。当時すでに多くの雑誌が電子ジャーナル化されていて、研究者はラボに居ながら図書館のホームページから論文のPDFをダウンロードして、ラボのカラープリンターで印刷していました。私の所属したラボは、かつては貧乏ラボでしたが、金回りが急に良くなり(私の研究成果のせい?)カラープリンターを持っていること自体が驚きでしたが、そこで雑誌と同じ形で文献をプリントアウトする様は、私にとって大変な驚きでした。

今の久留米大学医学部図書館は、2000年のNIHの図書館に非常に良く似ていると思います。今後、図書館がどう変化するかを予測するには、現在のNIHの図書館を知る必要があると思います。どなたか是非レポートして下さい。

